日新聞　第3種郵便物認可　4/7/2013 朝日

注目!

「戦争と一人の女」の井上淳一監督

巨匠継ぐ「闘う映画魂」

映画「戦争と一人の女」が、名古屋・名駅のシネマスコーレで27日から公開される。監督は犬山市出身の井上淳一さん(47)。シネマスコーレを主宰していた故・若松孝二監督に、大学進学と同時に弟子入りした根っからの映画人。巨匠を継承する「闘う映画魂」を存分にぶっつけた反戦映画だ。

「何を撮る」自主製作で開拓

——まずは作品紹介を。

戦闘シーンのない戦争映画です。舞台は戦中戦後の日本。戦争のために人間性が損なわれていった庶民の姿を描きました。男も女も自分の欲望にとらわれて、親密な交わりもあれば暴力的な交わりもあり、街は焼かれて大勢の人が殺され…。しかし、人間は、それでも生きていかなければならない。いまの社会状況にも当てはまるメッセージを込めました。

——俳優もスタッフも一流どころ。自主製作映画とは思えない顔ぶれです。

このような映画に大手の映画会社は資金を出しません。映画人として作らなければならない映画を作ろうという意思を持った人たちが脚本に共鳴して集まった、ということです。

——総製作費1200万円と聞きました。

誰も信じてくれません。ゼロひとつ余分にかかってるんじゃないの、と。俳優もスタッフも気の毒なぐらいの低ギャラで仕事を成し遂げました。日本映画の将来を考えれば、許されない「価格破壊」です。しかし、わたしたちは撮りたかった。

資金が限られ、撮影日数はわずか10日で日延べができないなか、野外ロケが好天に恵まれ、現場の結束も最高でした。いろいろな意味で、これは「奇跡の映画」です。

——若松監督との出会いを聞きたいのですが。

高1の終わりに「水のないプール」を見てファンになりました。ほかの映画とは明らかに何かが違っていた。大学受験を失敗して名古屋の予備校に通っていた19の夏、開館2年目のシネマスコーレで若松監督に出くわしました。がちがちに緊張しながら、弟子入りさせてと頼んだら、焼き肉屋に連れて行ってくれて、「まずは大学へ進め」と言われた。翌年、早大に入り、若松プロダクションに通う日々が始まりました。

——映画学校若松組の薫陶を受けたわけですね。

というか、いきなり助監督の仕事をやらされて、弁当をぴったりの数で用意できないと、怒鳴られたり蹴られたり。そして、撮影が終わると別人のように優しくなる。スタッフはみんな、あれに魅せられてしまう。

映画の技法なんてひとつも教わらなかった。たたきこまれたのは、撮影を滞らせないための人と物へのあらゆる目配り。現場を仕切る作法でした。

——映画の仕事をめざす後輩たちへ一言。

脚本は何をどう書くか、映像は何をどう撮るか、です。「どう」は専門の学校や現場でいくらでも学べる。誰でもデジタルで簡単に映画を撮れるようになり、裾野が広がったわりに頂点が高まらない。そんな日本映画に問われているのは、「どう」よりも「何を」なのだと思う。それを開拓できるのは自主製作映画なのではないか、という気がしています。

(聞き手・佐藤雄二)

記者の一言　若者に見せてあげたい

すてばちな男女の和合と、むきだしの暴力が、次々に描き出される。「18禁」の年齢制限がかかるのも仕方ないだろう。しかし、戦争とは無関係に、はなっからどん底を生きているヒロインのしたたかさと、映画中盤に布石を打ちこまれ、ラストシーンで輝きを放つものを目撃すれば、さて、どうしたものか。殺すな。死ぬな。自分よりは長い時間をこれから生きていく若者たちに何とかして見せてあげたくなる、そんな映画だ。